

# 眠狂四郎、その影のダンディズム

——シリーズ番外篇「贗者助太刀」と

「義理人情記」にみる後見の美学——

山口 和彦

キーワード：市井譚、真贋のモチーフ、虚無のぬくもり、影のリアリティ

## 1 序章：ふたつの市井譚

柴田錬三郎の著作では、題名が作品内容を伝える重要な役割を担っている。文芸作品における題名の重要性は、もとよりどの作家にもあてはまることではあるが、柴田作品、とりわけ代表作のひとつにかぞえられる眠狂四郎シリーズは、当初から一話読み切りの方式で週刊誌に連載されたこともあり、各話の題名が物語の内容と不可分に結びついた関係になっている。たとえばシリーズ第1弾『眠狂四郎無頼控』<sup>1</sup>の第1話「雛の首」では、将軍家より拝領した一对の男雛と女雛の行方が、主人公である眠狂四郎と、その命を狙うべく敵方から送り込まれた女密偵美保代との奇しき縁を示唆するものとなっているし、第100話「何処へ」は、宿敵が待ち構える死地へ赴き全身創痕になりながら、臨終の床に臥す妻美保代のもとへ帰り着いた狂四郎の妻との永遠の別離を描き、その後の主人公の果てなき旅路を暗示するといった具合である。

眠狂四郎作品の題名と内容とのこの有機的関係は、昭和31年から49年にかけて計7作の長篇が書き継がれたシリーズ本篇だけでなく、昭和33年から48年まで本篇の合間に不定期に執筆された中・短8つの番外篇にも見てとることができる。このうち昭和47年に発表された「贗者助太刀」と「義理人情記」の2短篇は、ともに「眠狂四郎市井譚の内」という副題を有し、通常の眠狂四郎ものとはいくぶん趣を異にする作風になっている。“市井”とは、「(中国古代、井戸すなわち水のある所に人が集まり市ができたからいう) 人家の集まっている所」<sup>2</sup>の謂であるが、本篇7作と番外篇8作を通じて、「眠狂四郎市井譚の内」との副題が添えられているのはこの2篇のみで、これらふたつの“市井譚”では、眠狂四郎が主役というよりも脇の人物として登場するところに特色がある。

時代小説ジャンルのうち、江戸時代やそれ以前の時代を舞台に「武家・貴族・僧侶<sup>そうりよ</sup>など上層階級の人物がおもに活躍する作品」<sup>3</sup>を“時代物”と総称しうるとすれば、

「江戸時代の町人社会に取材し、市井の事件や義理・人情の葛藤などを描いた作品」<sup>4</sup>を“世話物”と呼ぶことができる。この区分に従えば、「市井譚の内」との副題をもつ「贗者助太刀」と「義理人情記」は、眠狂四郎ものの中では後者に近く、町人社会の出来事や世態、風俗等を扱う世話物的性格をそなえているとみることができる。

眠狂四郎作品の醍醐味は、周知のとおり眠狂四郎という仮名をつかう市井無頼の浪人者の生の軌跡をたどることであり、虚構性ゆたかな物語世界の中心には剣の達人でもある主人公の孤独な生きざまが定位されている。文政から天保にかけての江戸後期を舞台とするこのシリーズは、当時の世相や社会の雰囲気や伝奇的小説宇宙の中に融合させた独特のスタイルでも知られるが、そうした江戸の情緒や風趣は、あくまでも主人公の像を引き立たせる副次的な役目をはたしている。眠狂四郎を千両役者とする物語の、いわば書き割りの役割である。

これに対して「贗者助太刀」と「義理人情記」のふたつの番外篇は、「眠狂四郎市井譚の内」という副題が示すとおり、江戸の市井の物語を描くことに主眼が置かれ、八百八町に生きる人々の暮らしや人生模様などが写し出される一方で、眠狂四郎は脇に控えた位置から、それらを見届ける役回りを演じるのである。小論は、眠狂四郎ものの中でもやや異色の2篇をとり上げ、その小説世界の形式や内容を明らかにしつつ、眠狂四郎の影のダンディズムとでも称すべき美学の一面を分節化する試みである。

## II 「贗者助太刀・眠狂四郎市井譚の内」について

「贗者助太刀」は昭和47年1月、月刊誌『小説新潮』に掲載された第6作目の番外篇である。本篇との関連をみておくと、昭和46年1月から12月まで『週刊新潮』に連載されたシリーズ第6弾『眠狂四郎無情控』の終了後に発表された作品ということになる。眠狂四郎シリーズは、不幸な出生の秘密をもつ主人公の境遇をめぐって、運命、孤独、漂泊といったライトモチーフが全篇の通奏低音をなすところに大きな特徴があるが、そのライトモチーフと関連して、人物のすり替わり、見かけと内実、仮面と素面などの主題が採りあげられることがある。たとえば本篇第5弾『眠狂四郎虚無日誌』では、将軍家世嗣の家慶に双生児の弟がいたという設定で、この実弟が家慶になりすます本物と贗者の物語が展開しているし、上述の『眠狂四郎無情控』には、世を憂える檄文を掲げて割腹自決をとげる江戸城本丸同朋・沼津千阿弥なる人物が登場し、狂四郎と千阿弥の両者に共通する仮面演技者のモチーフ<sup>5</sup>が、自分は何者なのかというアイデンティティに関わる主題と響き合う関係になっている。

こうしたシリーズ全体の脈絡の中で捉えるとき、「贗者助太刀」は本篇でも扱われる真贗のモチーフを軸に構成された短篇で、音にきく眠狂四郎の名を騙った若い浪人者が巻き込まれる、江戸市中での偽の仇討事件を題材にしている。4章立てのプロット自体は込み入ったものではないが、結末に向けて巧妙な伏線が敷かれ、その結びで初めて姿をみせる本物が、贗者にどう対応し、どう事件を決着させるかが見所となっている。

七福神の絵を描く内職で糊口をしのぐ浪人者の真崎兵吾は、ある日、絵を買い上げてくれていた問屋での浅はかな口論がもとで、その内職の口を失ってしまう。自分には向いていないことを承知で、食い扶持を稼ぐために続けてきた仕事とはいえ、「父が残してくれた本業」<sup>6</sup>を失い、兵吾が馬喰町近くの居酒屋でやけ酒をあおっていると、旅装の出立ちをした一人の美しい武家娘が入ってくる。職人や人足たちの視線は一斉に武家娘に向けられて、客同士のあいだに酔いにまかせた悶着が起ると、鬱憤のはけ口を見つけたとばかり平吾は仲裁に入り、「おれを誰だと思う！」と見栄を切る。「誰だとは、誰でえ？」との酔漢の口上に、「おれは、眠狂四郎だ！」と名乗ると、店の空気は一変する。「奇妙な仮名を名のるその浪人者の強さは、府内外に、知れわたっていた」上に、「誰も、眠狂四郎の顔を見知っている者」がおらず、「鼻梁高く、頬の殺げた、長身の兵吾」(237)を狂四郎と信じ込んだのである。

居酒屋を出た兵吾は、自分自身に嫌気がさす——「眠狂四郎の名をかたるとは、なんという見下げはてた奴だ(中略)。あの武家娘に、いい恰好をしてみせようとした性根は、腐りはてて居るぞ、真崎兵吾！」そのとき「あ——もし」と後ろから声がかかり、振り返ると居酒屋にいた武家娘が後を追ってきていた。兵吾は出すぎた真似を詫びて「すまぬ」と頭を下げるが、武家娘は「眠狂四郎様、おねがいがございます！」(239)と、真剣な表情で訴える。

二人が柳橋の舟宿に着いたとき、武家娘は進藤さえと名乗り、父の敵を討ちに江戸表へ出てきたことを打ち明ける。兄は返り討ちにあい、敵が道場を開くほどの腕前なので、親戚縁者に助太刀してくれる者はおらず、そこで高名な眠狂四郎に助太刀を願いたいというのである。腕に覚えのない兵吾は、内心「眠狂四郎の名をかたった罰だ」と悔いるが、さえは礼として「操を、貴方様に、さしあげます」(241)と平伏し、必死の嘆願をくりかえす。そしていくばくかの後、舟宿の二階で兵吾はさえと同衾するのである。

進藤さへの仇討ちは、それから3日後に行われた。「奉行所に届け出て、正式な敵討ちになったため」、馬場には夜明け前から見物人が詰めかけていた。「眠狂四郎が、仇討ちの助太刀をする」との噂が、人々を「蝟集させたのである。」もはや後に引けなくなった兵吾は、是が非でも「眠狂四郎になりすまさなければならなかった。」しかし「決死の覚悟を決めた」(244)とはいえ、いざ白刃を抜き合わせると、仇討ち相手の小藤田弥九郎との腕前の差は歴然としていて、兵吾は「おれは、贗者だ。助太刀は、止めだ！」

(245)と絶叫して刀を放り出したい衝動にかられる。やがて弥九郎が足を止め、徐々に剣を上段へ移すにつれて、「——斬られる！」と恐怖が全身を駆けめぐり、ついに白刃が完全に上段に構えられたとき、兵吾は「ちがうっ！」と悲鳴にも似た声を発する。その瞬間、「弥九郎の五体が、なぜか、ぐらりとゆれ」て、「顔面が、苦痛で、歪んだ。さえが、その隙をとらえて、まっしぐらに、小刀を突きかけ」、「したたかに、脾腹を刺し貫かれて」(246)、弥九郎はさえと折り重なるように地面に倒れる。弥九郎の足首には、小柄が突き刺さっていた。

群集のどよめきに、われに返った兵吾は急ぎ足で馬場を後にする。意外な賛辞をあびて、一刻も早く逃れたかったのである。馬場の木戸口に出て一息ついたそのとき、

「お主、助太刀した娘が、男であると気づいて、買って出たのか」と、冷やかな問いが横合いから投げかけられる。「深編笠で顔をかくした、黒の着流し姿が、そこに佇んでいた。」「どうやら、あれは、殿様の寵愛でも蒙っていた色小姓のようだな。」兵吾が「この御仁が、小柄を投じて救ってくれたのだ」と悟り、「お、お手前は——？」(247)と訊ねると、浪人者は歩を運びつつ、「眠狂四郎とおぼえておいて頂こう」(248)との一言をのこすのであった。

このように「贋者助太刀」は、江戸市中でしががない内職暮らしを送る若い浪人者を主たる登場人物とする短篇である。世渡り下手なうえに何ごとにも経験不足で、女装した男と同衾したことにも気がつかない未熟な浪人者の、若さゆえの見栄と虚勢が招いた偽りの仇討の顛末を描いている。本物の名を騙った贋者が武家娘を助太刀するというのが、題名の第一義的意味であろうが、仇討を願い出た武家娘もじつは贋者であると判る結末のもうひとひねりを考量すると、贋者が贋者を助太刀するという意味が重ね合わされているとも考えられるし、さらには本物がふたりの贋者を助太刀するという意味が内包されているとも解せるかもしれない。

もとより作者は題名の真意を語ってはいないし、真贋のモチーフも正面から採りあげているというよりは、プロットに重層性を与える要素として巧みに利用しているとみるべきであろう。いずれにせよ「贋者助太刀」は、なりすましの物語に謎解きの要素を加え、意外な真相が明かされる結びへと収斂するよう組み立てられた短篇で、その計算されたプロットのもとで、狂四郎は自分の名を騙る贋者に人知れず救いの手を差しのべつつ、うそ偽りのない事実をも伝える影の役割を演じるのである。なるほどこの短篇では、狂四郎本人の登場シーンはごくわずかで、しかも結末近くで初めて姿をみせるという演出であるが、それでも影の黒子に徹する狂四郎のすがたが印象的なのは、まず第一に狂四郎のことばにそれだけの重みがあることを理由に挙げることができるであろう。狂四郎は普段から寡黙であるが、その一言一句には鋭い洞察力に裏打ちされた真実味がこもっている。実際、偽りと欺きに満ちたこの物語の中で、狂四郎のことばだけがウソとは無縁である。次に、そのことばと同様の深みが、狂四郎の緘黙には感じとれることも理由として挙げられるであろう。寸鉄人を刺す言辞のみならず、その無言にも深い意味が内包される場所にダンディの本領があるとすれば、狂四郎の無言も多くのことを語りかける。彼の沈黙は雄弁なのである。さらに、ことばとも沈黙とも共通するスタイリッシュさが狂四郎の挙措に具わっていることも付言しておくべきかもしれない。要するに、彼のことば、沈黙、立居振舞のすべてに一分の隙もないほど張り詰めた神経が行き届き、それらが渾然一体となって狂四郎の独特のダンディズム美学をかたちづくっているのである。

### III 「義理人情記・眠狂四郎市井譚の内」について

「義理人情記」は、昭和47年1月発表の「贋者助太刀」につづいて同年9月、第7作目の番外篇として『小説新潮』に掲載された。なりすましのモチーフを変奏して、

江戸市中で起きた偽の仇討事件を描いているのが「贗者助太刀」であるとすれば、「義理人情記」は“義理と人情、江戸の花”とも称された義理人情を題材に、渡世人たちの人間関係のしがらみや葛藤を描いた短篇である。眠狂四郎は「贗者助太刀」におけるほど黒子に徹しているわけではなく、冒頭から登場して渡世人の後見的立場に身をおき、浮世の絆と情けのドラマに立ち会うことになる。

下総の銚子を「昼すぎに出帆して、勝浦や洲崎や木更津に寄港し乍ら、翌朝、江戸へ着く」(250) 御用船に、勝浦から若い渡世人が乗り込んでくる。養老川の奥で生まれて、養老政との通り名をもつこの渡世人の政五郎は、すでにしたたか酔っており、一升樽を抱えて胴の間に降りてくると、胡座をかいたとたん大声で喋りまくる。「酒は、いいやな、酒は——。天の美禄っていわあ。浮世の憂いを掃う玉箒、ともいうんだぞ。(中略)……なんでえ、どうして、おめえさんがたは、飲まねえんだよ、百薬の長をよう。」そのとき酒の対手を物色する渡世人の酔眼に「刀を抱いて、うっそりと板壁に凭りかかっている浪人者」のすがたが映る。「彫の深い、頬の殺げた、蒼白な——一瞥しただけで、背筋を寒くするような暗い翳を刷いた浪人者であった。」(251) 渡世人がいざり寄るのを見て、「わたしを、虫の好く対手と見たのか」(252) と浪人者が問うと、潮来あたりの親分衆の用心棒稼業をする御仁と見たという。平然と茶碗酒を重ねる眠狂四郎の前で、ほどなく養老政はがくんと前へのめり伏す。

小半刻が過ぎて夜も更けたころ、ひとつの影が音もなく渡世人に忍び寄る。二十歳あまりの商家の娘で、整った顔立ちの目もと口もとには殺意をみなぎらせていた。胴の間のうす暗がりの中で、その娘が白鞘の匕首を抜きざま、背後から渡世人の心の臓めがけて突き立てようとした刹那、匕首をつかむ娘の右手首を刀の鐙がびたりと押えた。眠っていると見えた浪人者であった——「お前が女であっても、酔いつぶれた男を刺す卑怯なふるまいは、看のがせぬ。」(253)

翌朝、御用船は江戸の新大橋たもとに着き、思い思いの方角へ散っていく船客の中に養老政の命を狙った娘がいた。それには目もくれず狂四郎が歩を進めていると、背後から声かけられる。渡世人の養老政であった。養老政は昨夜の非礼をわび、迷惑ついでに一つ頼みがある——これから自分は猿江の五郎次という兄弟分に斬られに行くが、ついては亡骸を無縁仏として本所の回向院へ葬ってもらえまいか、埋葬代と読経料の一両を含めて懐には十両あるので、それで頼みたいというのである。養老政の話では、五郎次の女房のお咲が政五郎の幼友達で、そのお咲が家出したさい置き手紙を残し、自分は政五郎に惚れていて、どうしても一緒になりたいから許してほしい旨のことが書かれていた。お咲はいったん養老政のもとへ身を寄せたが、家出のわけを語ることなく姿を消し、翌朝、母親の墓前で自害しているのが発見された。頼って来たのをすげなく追い出したせいだと、周囲からは冷たい目で見られたが、政五郎としては死人に口なしで、下手な弁解などせず、潔く五郎次に斬られに行くほぞを固めたという。「すると、お前は密通したのをみとめた結果になるが——」と云う狂四郎に、「渡世人のはしくれとして、未練たらしく、無実だと弁解してもはじまりやせん。養老政は、生命が惜しくて、五郎次に、土下座した、と世間にわらわれるよりは、いっそ、男らしゅう……」と、政五郎は自分の覚悟を告げる。「お前は、まことは、胸の奥

底では、そのお咲という女を、想っていたのだろう。」(256) 凶星だったようで、政五郎の表情は狂四郎のことばを否定してはいなかった。

二人が猿江町にある五郎次の家の前前に立ったとき、狂四郎は十両を受けとるのは回向院へ亡骸を運んでからにしようと語って外にとどまり、養老政は一步一步踏みしめるように独り玄関へ向かう。普段なら乾分が十数人はいるはずなのに人の気配がない。養老政が三度案内を乞い、ようやく廊下を踏んでくる躰音がきこえて五郎次本人が現れる。ともに二十八歳で、五郎次は政五郎より二つ三つ若く見える童顔であったが、どうしたわけかげっそりやつれ、無精髭ものび放題、着た切りのように浴衣一枚をまとっていた。お咲が自害したことは早飛脚で知らせてあったが、五郎次のあまりの変わりように養老政は呆然とする。

座敷に通された養老政は五郎次から、乾分には当座困らぬだけの金を与えて一人残らず渡世の足を洗わせたと聞かされる。いきり立たねばならぬはずの五郎次が悄然として、斬られに來た自分の方がいきり立っているその状況に、養老政は自身の覚悟を伝え、お咲の残した手紙が嘘だというわけを知りたいと執拗に詰め寄る。しばらく押し黙ったあと、五郎次はようやく重い口を開き、お咲はまだ <sup>きむすめ</sup>未通女 のままだったと告げる。

「なんだと!？」

「そうだったのだよ、養老の——」

「三年も、一緒に、くらし乍ら、夫婦にならなかった、というのか? そんな、莫迦な!」

「亭主だったおれが、云うのだから、まちがいはねえ。」

(中略)

「どうして、夫婦にならなかったんだ? え、どうしてなんだ? おめえさんは、お咲さんに、首ったけ、惚れていたじゃねえか。」

「惚れていた、たしかに——」

「それなのに、どうして、一度も、抱いてやらなかったんだ? え、おい、どうしてなんだ?」(260-261)

「……………」

「黙っていちゃ、わからねえ! 教えてもらおうじゃねえか!」

養老政は、呶鳴るように、返辞をもとめた。(261)

やがて生きて出てきた養老政を、狂四郎が往還上で迎えた。斬られたならば気配で感じとれると待っていたのである。

「申しわけありやせん。五郎次は(中略)腑抜けになっていやがって…………」

「対手が斬らぬのなら、べつに、死に急ぎをする必要はなかろう。」

「あっしゃ、覚悟をして、やって來たのに(中略)。莫迦にしてやがる! 五郎次

の奴、人をこげにしやがって、……水盃で、兄弟分の誓いを流そうとぬかして——。挙句の果ては、女房の置手紙は、嘘を書いていたとか、三年も一緒にくらして居り乍ら、お咲は、未通女だったとか……」(261-262)

いまいましげに養老政が石ころを川へ蹴とばしたとき、狂四郎はふと予感したように首をめぐらし、船で政を刺そうとした娘が五郎次の家の門をくぐるのを目にする。狂四郎は養老政に近くの茶屋で待つように告げ、五郎次が斬らなかった理由が、もしかすると判るかも知れぬ、と云いのこして五郎次宅へ向かう。その頃、お咲の妹のお幸は玄関で五郎次と対面し、姉の仇を討とうと養老政を追って来たが、「お義兄さんが、仇を討ちなさるのが、筋道だと思いなおしました。これで、姉さんのうらみを、はらして下され！」(263)と、お咲が自害に用いた匕首を手渡して去る。

五郎次は座敷へすわった後も虚脱の態であったが、われに返り、血のりで曇ったその匕首で自刃をはかろうとしたとき、小柄が庭から飛来して右手甲を貫く。狂四郎はしずかに座敷に上がり、「きかせてもらおうか、真相を——。兄弟分や義妹には、打明けられなかったが、いっそ、縁もゆかりもないあかの他人なら、しゃべりやすいだろう」(264)と促す。四半刻のち、狂四郎は茶屋へひき返し、息をつめて待つ養老政をじらすように酒を頼み、「まず、飲め」(265)と勧める。養老政が茶碗酒を一息に飲み干すのを待ってから、狂四郎はお咲が五郎次の腹違いの妹だったという意外な事実を伝える。狂四郎が云うには、亡父の下僕からその事実を知らされた五郎次は、しかし下僕の忠告を斥けて、お咲を女房に迎えた。「だが、抱けなかった。妹を抱くわけにいかなかった。……お咲は、どうして、良人が抱いてくれぬのか、いぶかり、うらみ、なやんだ。……その挙句、お咲に、本当の女房にして欲しい、と迫られた五郎次は、ついに、真相をぶちまけた。……お咲が、家を出たのは、それから、一月後だった、という次第だ。」(266)きかせ終わると狂四郎は、養老政の空の茶碗へなみなみと酒をついだ。

「義理人情記」は、浮世の義理にしばられる渡世人の養老政と五郎次、お咲とお幸の4人の人生の断面を切り取った物語である。兄弟分の五郎次に嫁いだお咲を想いながら、助けられずに死なせてしまった養老政、惚れたお咲が腹違いの妹であると知りつつ女房に迎えた五郎次、お咲の自害を養老政の非情のせいと思い込み、仇と狙う妹のお幸。「積悪の家には必ず余殃あり」<sup>7</sup>とは『太平記』にみえる一節であるが、余殃ともいうべき災いを彼らにもたらしたのは、五郎次の父五郎佐衛門の所業であった。女房を喪ったさい、葬儀を手伝いにきた義理の妹を、五郎佐衛門が出来心で犯したのである。上総の漁師に嫁いでいた義妹はその後お咲を産み、父親が亡姉の良人であることを決して口外はしなかった。しかし主人の乱行を偶然目にしていて五郎佐衛門の下僕が、お咲との婚礼をひかえた五郎次に、祝言をとりやめるよう忠告したのである。

運命や宿命のライトモチーフが柴田作品の底流をなしていることは先に言及したが、この市井譚では“親の因果が子に報いる”構図が組み入れられて、運命のいたずらに

人生の歯車を狂わされる4人のすがたを、養老政を後見する立場から狂四郎が見届ける体裁である。起承転結をなす4章立てのプロットの均整もさることながら、そこに写しとられた義理人情のドラマを通じて、眠狂四郎という虚無の男の内なるぬくもりがしみじみと感じられる作品で、大方の狂四郎ものとは異なる味わいが湛えられている。

虚無の男のぬくもりとは、なるほど一見撞着語法のようなものであるが、眠狂四郎の人物造型に即して考えるとき、決して矛盾した評言ではない。その容貌、振舞いがどれほどニヒルに映ろうと、いっさいの真理や価値を信じないニヒリストとは狂四郎は截然と一線を画している。いや、それどころかニヒルとは相容れないウェットな真情を胸底に秘めもつ人間とさえいうことができる。その心奥の秘事を他人に気取られまいと、あえて虚無の仮面をかぶりつづけているのが狂四郎であるといえよであろうか。作家の沢木耕太郎は、柴田作品を愛読した理由について「柴田錬三郎に特有とされるニヒリズムに感応したためだろうか。いや、私は柴田錬三郎の作品からニヒリズムを感じてはいなかった。(中略) 眠狂四郎のニヒリズムというものも、必ずしも徹底したものではなく、徹底しようとして徹底しきれない、その裂け目にのぞく独特の甘さが、物語の魅力になっていることを理解していた」<sup>8</sup>と記しているが、至言であろう。沢木の明察どおり、ニヒリズムに徹しようとして徹しきれない、「その裂け目にのぞく独特の甘さ」が狂四郎の人的魅力となり、それがまた「義理人情記」という市井譚の滋味を下支えする効果をあげているのである。物語の結びで狂四郎が養老政にかけることばは、その意味で狂四郎が胸中に秘めた真実の一端をうかがわせてあじわい深い——「お前は、昨夜は、死ぬ覚悟のために泥酔したが、今日は、生きのびるために、酔うがいい。ふところの十両は、酔いつぶれるまでの飲み代だと思え。」(266)

#### IV 終章：影のリアリティ

昭和47年に発表された2つの番外篇「贗者助太刀」と「義理人情記」は、以上見てきたように、眠狂四郎ものの中でもいくぶん特異な位置を占める作品である。「眠狂四郎市井譚の内」との副題が示すとおり、両短篇ともに江戸市中の物語としての性格をそなえ、前者は世事にうとい未熟者の浪人の若さと虚栄が招いた偽の仇討事件の真相を、そして後者は義理に厚い渡世人と彼にゆかりの者たちの人間模様を、それぞれ描き出していて、眠狂四郎は主役として前面に立つというよりも、脇に控えた影の位置から、彼独特の存在感を発揮する趣向になっている。もっとも、作中人物に対する狂四郎の接し方や距離には違いがあり、「贗者助太刀」では若くて経験に乏しい浪人者に土壇場で救いの手を差し伸べつつも、冷厳な現実を目のあたりにさせるといふ決着のつけ方であるのに対して、「義理人情記」では冒頭から結びまで終始、渡世人の覚悟に寄り添う後見役をつとめるというように、作中人物との関わり方には相違がみられるものの、彼らの人生を見届けるその姿勢に狂四郎のスタイリッシュな身上が窺えることには変わりがない。



ここで改めて眠狂四郎の人物像に触れておくと、もともと狂四郎は親しみやすい印象を人に抱かせるタイプではない。むしろ他者との関わりを頑に拒否することもないが、つねに一定の距離をおいて人と接することを流儀とする人間である。べたべたする関係を嫌うその独特の距離感は、まさに剣に生きる達人の間合いを想わせる。剣を交える相手の技量の見定めといい、生死を分ける汐合いの見極めといい、いずれも他者との間合いを見切る修練に通じているといえるであろう。この対人間の距離の測り方こそ、狂四郎のダンディズムを特徴づける戦略的根柢のひとつであり、いついかなるときも「心を動かされまいとする揺ぎない決意」<sup>9</sup> が彼の間合いの美学を支えているのである。

影の立場に身をおいているにもかかわらず、「贗者助太刀」と「義理人情記」における眠狂四郎の存在感がなおも稀薄化しないのはなぜか。ここで作者の表現手法に着目するならば、これら2篇の市井譚で、作者は狂四郎を前面に押し出さないことによって、逆にその存在を印象づける手法<sup>10</sup>を選びとっている。すなわち、ダンディの影を濃く際立たせることで、かえって本体のリアリティを強く意識させるのである。影をして本体を逆照射させる表現手法とでも呼べばよいであろうか。ダンディズムの始祖といわれるポー・ブランメル<sup>11</sup>の逸話<sup>12</sup>を引き合いに出すまでもなく、影をも含む実体が一個の芸術作品たりうるのがダンディある。とすれば、真のダンディは正対する姿のみならず、その横顔や後ろ姿で多くのことを語りうるのであり、その影もまた実体の真実を雄弁に表現するのである。

もちろん、こうした手法が奏功するには、影の実体が確固たるリアリティをそなえていなければならない。沢木耕太郎が評したように、冷たさに徹するようで徹しきれない「その裂け目にのぞく独特の甘さ」が、眠狂四郎の人物像をリアルなものにしていることは疑いを容れないが、そこにダンディズムを奉ずる作者自身の美学が投影されていることも確認しておく必要がある。狂四郎の言辞、沈黙、所作のすべてにスタイリッシュさが認められることは先述したが、「贗者助太刀」における狂四郎のクールな振舞いにせよ、「義理人情記」で見せる粋な計らいにせよ、そこにはダンディズムという精神の存在方式への作者の深い理解と洞察を読みとることができる。柴田がエドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』の結びのシーンを、「私がいちばん好きな場面である」と明言するのは決して偶然ではない。愛するロクサーヌに想いを伝えぬまま、迫り来る死神に向かってシラノが「おれのすべてをくれてやる。(中略)しかし、ただひとつだけ、貴様らに絶対に奪われないものがあるぞ」といい、「それは、なんなのですか？」と訊くロクサーヌに、「それはな、このおれの心意気だ！」<sup>12</sup>と呟いて息絶えるシーンである。あえて極言するなら、このシラノの最期に柴田はダンディズム美学の極致をみている。運命を受け容れることは、ただ受動的に運命を甘受することを意味しない。抗すべくもない強大な力に直面したとき、その逆境といかに対峙するか、その人物の精神の力量が、いいかえればダンディズムの真髓が示される。

こう考えるとき、「贗者助太刀」と「義理人情記」の2篇の市井譚には、脇に控える狂四郎の後見の美学を通じて、影のダンディズムとでもいべき精神のスタイルが表現されていると思われる。前者では、世間知らずの浪人者を遠くから見守り、後者で

は、渡世人の死への覚悟とやるせない想いに傍で心を寄せるすがたが、狂四郎の存在感を際立たせ、それによって作者は狂四郎の体現する精神の美学を的確に形象化している。もちろん、これら2篇で皮肉な運命と向き合うのは狂四郎ではないし、また彼自身の運命観が披瀝されるわけでもないが、人生経験の浅い浪人者の影となり、一命を賭する渡世人の生きざまをつぶさに見届ける姿勢を介して、狂四郎自身の生きざまが、そして運命への対峙の仕方が期せずして透けて見える描き方になっている。不幸な星のもとに生を享けた狂四郎自身、異人と日本人の姦淫の子としての宿命を負う人間であり、彼ほど運命の不条理を体現するにふさわしい人物もめずらしい。その瘦躯異相が滲ませる寂寥感、狂四郎が十字架として背負う因果な宿運に由来し、稀世の剣の使い手でありながら無敵でも完全無欠でもないその個性が、この異端的孤絶者の像をいっそう真実味あるものにしてしているのである。作者は、眠狂四郎の影のリアリティを通じて、いわば搦め手からダンディズムの特質の一端を浮かび上がらせているのであり、狂四郎は実体のみならず、その影までもがダンディズムを具現化する存在たりえている。ポー・ブランメルの後裔と、眠狂四郎を評しうる根拠もまたそこにある。

---

#### 注

- 1 「眠狂四郎無頼控」を第1弾とする眠狂四郎シリーズの本篇は、すべて『週刊新潮』に連載されたのち単行本化されて、現在では全7作が新潮文庫に収録されている。
- 2 『広辞苑』の【市井】の定義による。『広辞苑 第七版』、岩波書店、2018年、1285頁を参照。
- 3 『日本大百科全書』の【時代物】の項を参照。『日本大百科全書 10』、小学館、1986年、829頁。
- 4 『明鏡国語辞典』の【世話物】の定義による。『明鏡国語辞典』、大修館書店、2002年、909頁。
- 5 眠狂四郎と沼津千阿弥は、ともに素顔の上に仮面をつけた演技者として造型され、作中では互いに強く意識し合う者同士として描かれている。なお、沼津千阿弥のモデルは、「眠狂四郎無情控」の週刊誌連載が始まる2ヶ月前(1970年11月25日)に、割腹自決をとげた三島由紀夫と考えられる。
- 6 柴田錬三郎『新篇 眠狂四郎京洛勝負帖』、集英社<文庫>、2006年、232頁。これ以降、本文中の引用後の括弧内の数字は同書の頁数を表すものとし、引用文中のルビ等は原則として省略する。また同頁から複数の引用を行う場合は、その頁からの最後の引用の後にのみ頁数を記す。
- 7 平家物語にも「積善の家に余慶あり、積悪の門に余殃とどまるところ承はれ」という一節がみえる。『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』、小学館、2002年、557頁の【余殃】の項を参照。
- 8 沢木耕太郎「解説」、柴田錬三郎『柴田錬三郎選集 第三巻 剣は知っていた』、集英社、1990年、542-543頁。
- 9 ボードレールは「ダンディの美の性格は、何よりも、心を動かされまいとする揺ぎない決意から来る、冷やかな様子の裡にある」と述べている。シャルル＝ピエール・ボードレール「現代小説の画家」『ボードレール全集IV 散文詩 美術批評 下 音楽批評 哀れなベルギー』、阿部良雄訳、筑摩書房、1987年、169頁。
- 10 この種の狂四郎の描き方は、晩年の『うろつき夜太』にも見ることができる。この作品では、全50話中6話にのみ、狂四郎は脇の人物として登場するが、それでもその存在感は際立っている。『うろつき夜太 (上) (下)』、集英社<文庫>、1987年を参照。

<sup>11</sup> 今日まで伝えられるブランメル伝説や逸話のたぐいは数々ある。イギリスのロマン派詩人バイロンが「余はナポレオンたらんよりもブランメルたらん」と述懐したことは夙に知られているし、『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』を著したフランスの小説家バルベール・ドールヴィイは、「ダンディズムとは一つの在りかた全体である。けだし人間は具体的に目に見える側面だけで存在するものではない」と語り、ブランメル伝説についてはその特徴を次のように説明している——「この人物は、あまりにも表面的に判断されすぎるが、きわめて知的なちからの持ち主であり、言葉による以上に起居振舞によって支配したのだ。他人にたいする彼の働きかけはもっぱら言葉を通じてなされるそれよりも直接的であった。口調、目つき、身振り、あからさまな意図、さらに沈黙を通じてまで、彼はそれを産み出したのだ。」生田耕作『ダンディズム 栄光と悲惨』、奢瀨都館、1987年、112-113頁、および214頁を参照。

<sup>12</sup> 柴田錬三郎「首相は空を上げ」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、112頁。

2021年2月9日受理 2021年2月20日採録決定